

実践研究福井ラウンドテーブル

Summer Sessions 2017 実施報告

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions が、2017 年 6 月 23～25 日までの 3 日間に渡り開催されました。23 日（金）のプレ・セッション、24 日（土）のポスターセッションならびに Zone（テーマ）毎でのシンポジウムとフォーラム、そして 25 日（日）のラウンドテーブル。参加者は 566 名にのぼりました。本号ラウンドテーブル特集号では各 Zone の様子をお伝えするとともに、参会者から寄せられた感想を広く紹介します。

Zone A 学校

これまでの振り返ることで改めて考えを深められる場

長野県伊那市立伊那小学校 佐々木英明

2011 年 2 月以来、3 回目のラウンドテーブルに参加させていただきました。これまで 2 回のラウンドテーブルでは自分の学級のチャボの実践を小グループのなかで発表させていただきました。十分な発表時間をいただき一年間の実践を語り、職種の異なるグループの皆さんから、様々な視点で質問や意見をいただくことで、これまでの実践の価値に改めて気付いたり、これからの新たな課題が見つかったりして、とても学ぶことが多く、実践することへの勇気とやる気をいただくことができました。本校では毎年 5 名ほど参加し発表させていただいていますが、皆ラウンドテーブルのよさを感じています。また、参加した他校の先生方との交流も生まれるなど、教育に関わって視野を広げさせてもらっています。

さて、今回は ZONE A で「新しい世代を支える」をサブテーマに、職員が異動によって入れ替わっていくなかで、どのように学校のもつ文化が受け継がれていくのかということについて発表する機会をいた

だきました。本校では「はじめに子どもありき」を教育の基本原理として、「子どもは、自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力をもっている存在である」という子ども観を礎とし、総合学習・総合活動を中核にすえた教育課程を編成して長年研究を進めてきました。毎年 2 月に開催される全国学習指導研究会は本年度 39 回目を迎え、平成 30 年 2 月 3 日（土）に開催します。公立の小学校でありながらどうしてぶれることなく研究が受け継がれていくのかという質問をよくいただきます。今回の発表は、このことについて改めて考える機会となりました。

この子ども観を大事にし、子どもができたかどうか、そのための教師の手立てはどうかといった方法論的な研究ではなく、常に子どもの姿の内にあるものを、子どもの言葉、表情、仕草を手がかりに探ろうとする事例研究を一貫して続けてきたことが、本校の研究が続いてきた理由であることは明らかです。そして、学年会を中心とした学年研究を、研究主任と

各学年1名からなる研究部が連携して研究を推進するシステムが確立され、それぞれの学年の研究に全職員で関わっていくことで、新しい職員は本校の子ども観や研究を理解していきます。しかし、それ以上に大きな役割を持っているのは学年会です。私たちは子どもの内を探ろうとして、いつでも語り合い、互いを尊重し合いながら共につくりあげていこうとする学年会による協働研究を進めています。そして、それが学年を超えた機動力のある真の同僚性につながっていると思います。今回の発表にあたり、私は1年生から6年生まで一緒に歩んできた学年の同僚6人と語り合い、力を合わせてやってきたことが次々に思い出され、一緒に過ごしてきた同僚から本当にた

くさんのことを学ばせてもらったことを改めて実感することができました。

私は、この発表を通して自分の実践ではなく、同僚の実践と自分の関わりについて、これまでを振り返ることができました。発表、そしてその後の小グループでの議論を通して、考えを深めることができたと思います。発表の機会を与えていただいたことに改めて感謝したいと思います。また、ポスターセッションでの中学生の立派な発表や各校の興味深い取り組みを知ることができ、たくさんの刺激をもらうことができました。このことをこれからの自分自身の実践に生かしていきたいと思います。

Zone B 教師

Zone B 2

やっぱり教職には夢がある

神奈川大学非常勤講師 本間 利夫

福井ラウンドテーブルの参加は4回目。私にとって諸般の理由でおそらくこれが最後になるかもしれないとの特別な思いでの参加であった。

今回は、まずはポスターセッションで神奈川大学教職課程がこの13年間取り組んできた学校ボランティアの実践を発表させていただいた。引き続きゾーンB2(a)「これからの学部養成段階の教員養成を考える」においても、この取組の詳細を報告することができた。とりわけ、私が2013年度以来力を入れて実践してきた、ボランティアの学生のみならずボランティア先の教員、特に若手教員の資質能力を同時に高める試みには参加の方々から多くの意見をいただき力となった。

このゾーンでは神奈川大学の他、長崎大学、岐阜聖徳大学からの報告があった。共通しての話題は学部段階の早い時期から何らかの学校現場での体験

が教員養成上大変有効であることの確認とそのための工夫、課題であった。一方、話し合いが深まるにつれ、教員養成大学の置かれている厳しい現実や、ブラック企業化しているともいえる教員の労働環境も話題となった。私個人としては、このゾーンの副題「実践を聴き、夢を語る」とうらはらに、「学生に果たして自信をもって教職を勧められるのか」との思いもどこかに負わされた2日目であった。

3日目のラウンドテーブルは、福井大大学院田中さんの長期インターンシップ報告、砺波市立庄西中学校坪本さんの理科の授業実践、東大教育学部附属中等教育学校福島さんの総合的な学習の授業実践発表を中心とするものであった。田中さんは、苦しかった非常勤講師から今の長期インターンシップにつながる学びを若者らしく率直に語られた。私自身の中学校現場での若いころの経験と重なり、一人の

若者の成長する姿が何とも嬉しかった。坪本さんは、生徒自身が問題を発見し「なぜだろう？」と考えたくなる「燃焼」の単元の詳細な報告であった。生徒たちに発見の喜びを実感させるため何回ものトライ授業を試み改善を図られたことで、生徒たちが確実に学びの楽しさを感じている様子が伝わってきた。福島さんの実践は身体表現をとおして社会に生きる力を育くむ実践であった。沖縄の民俗芸能を踊ることを中心に沖縄での体験学習にさまざまな側面から取り組む正に総合的な学びそのものであった。発表された映像とその後の追跡調査をみて、生徒が、かくも自分の生き方と結び付け成長していくものかと深い感動を覚えた。

三つの実践はどれも創造的で学びの楽しさや深さを感じさせるもので、改めて教育の醍醐味、無限の可能性に触れることができた。何よりも三人から、指導支援することが楽しくてしょうがない思いが伝わってきた。生徒の変容を喜び、生徒から学び、生徒とともに成長しているのが共通点であった。前日私の抱いた教職への疑念はこのラウンドテーブルで完全に払拭できた。実感「やっぱり教職には夢がある」。学校現場での今までの自分の体験に、この三つの実践をプラスして明日からまた新たな気持ちで教職をめざす学生に教職の素晴らしさを語っていこうと決意できた福井ラウンドテーブル 2017 であった。

「コミュニケーション力」なんていうチャラチャラしたものでなく

神奈川大学非常勤講師 鈴木 英夫

プレセッション、ポスターセッション、ZoneB2, Round Table Cross Sessions と今回初めてフル参加した。ポスターセッションは、高等学校在職時代に担当教諭に指導を依頼し生徒にポスターセッションを実施させたことはあったが、自分自身が主体となってポスターセッションに参加するのは初めての出来事だった。神奈川大学教職課程が学校ボランティアを通して教師を目指す学生を育てていることの全体像を一枚のポスターに表現し、そのポスターの前で15分の発表をする。そのことの準備のためには、神奈川大学教職課程がやってきた学校ボランティアに関する歴史や、広がり、ふり返りの仕組み、成果をどう捉えるかを整理し関係者で共有する必要があった。一枚のポスターに集約させるからこそ、全体像を関係者で語り合う、あるいは聴き合うと言う省察の活動が必要であった。準備の段階ですでに、福井大学ラウンドテーブルは始まっていた。

印象に残ったのは、3日目のラウンドテーブルであった。大学の教員、教育委員会の主事、高校の教諭、小学校の教諭、大学院生達と言う構成で、100分のセッションを実行するのは相当のエネルギーが必要だ。実践の長い道のりを語る人も疲れるし、聞く人は、聴き取らなければならないわけだからそちらも疲れる。今回は聴き手だったわけだが、発表者のふり返りを伴走するために、細部の事実や、細部の感想や感情を掘り起こす手伝いをする。そうした手伝いを通して自分の実践を関係付けて語り、自分の道のりを振り返る。発表者は共同作業の中心にいて、ラウンドの参加者に支えられて自分の歩みをふり返るから、関係性の温かみに包まれる。一方、聴き手は発表者の実践を追体験しながら、自分の語れるものを選んでその場に広げて見せる立場なので、自分の実践をその場では共有してもらえないので孤独な立場だ。語り、聴き取るというラウンドテーブルの場で成立している

のは、今はやりの「コミュニケーション力」などという自分の本体にとってつけたような持ち物のような「力」ではなく、長い道のりを支え合うコミュニティ

であり、それが実践者自身の気づきとなって、また、聴き手の気づきにもつながり、次の実践へのエネルギーを得る場である。そんなことを感じた。

福井ラウンドテーブルに参加して

岐阜聖徳学園大学教育学部 教授 柘植 良雄

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院が来年4月から本格的にスタートすることに伴い、今年度4月より福井大学ラウンドテーブルに参加させていただいています。そして、今回初めて、学部学生と一緒に「ZoneB2」のラウンドテーブルに参加する機会を得ました。本学から参加した学生は、「フレンドシップ」（子ども理解科目群）を履修している3年生の2名です。

当日は3つのセッションがありました。1・2階フロアで行われた1時間のポスターセッションの後、教員チームと学部学生チームに分かれて論議されたセッション2、教員が学部学生チームに入って語り合うセッション3の3時間余りのラウンドテーブルでした。私は、これら3つの中で、最も印象的で学生のエネルギーを感じたのは、各種学校等のポスターセッションでした。

その発表内容は多種多様で、多くが自分たちの実践の構えや活動の様子、作り上げたもの、活動を通して学んだことや感じたことが中心でした。発表者には自らのコーナーに集まった聞き手を意識し、分かりやすく説明しようとする心配りが感じられ、いつしか彼らが各学校の代表になってい

るという意識と、その責任のようなものを感じながら発表しているように思いました。

こうした学生の姿は、本学においては教員採用試験を数ヶ月先に控えた4年生の4月中旬以降に見られる姿であり、日頃大学で授業を受けている学生の姿や雰囲気とは大きな違いを感じました。あちこちのコーナーで大学生が発表する姿を眺めながら、「この学生は教壇に立ったら、子ども達にきっとこんな話し方や表情で授業をするのだろう」と、やがて教壇に立つ学生の姿を思い浮かべながら見させてもらいました。本教育学部は各学年400名弱の学生がおり、その7～8割が毎年教員になっていきます。昨年度は教採受験者の7割が現役合格をしましたが、一人一人の学生にこういった場での体験や他大学学生との語らいが早くにあれば、その後の大学生活や教採試験に向かう意欲も、もっと改善できるのではないかと感じました。

4年間の学生生活の中で、このような体験活動やそれに代わる価値ある経験を学生一人一人にどのように保障したらよいのかを、改めて考えさせられたラウンドテーブルでした。

大きな夢 ―Zone B2「これからの学部段階の教員養成を考える」に参加して―

一宮研伸大学看護学部 助教 肥田 武

教員養成大学卒業後の2003～2008年度、僕は中学校教員として教育を「実践」した。しかし退職して進学し、研究大学の大学院で教育を「研究」することを学んだ。今は看護大学で一般教養の教員をしているが、今回Zone B2に参加し、久々に「教員養成」に触れることになった。特に印象に残ったことを2点述べる。

第1はテーブルで出会った先生方が例外なく、教育に「夢」を語る素敵な先生ばかりだったことである。

A先生とB先生は小中学校教員として、その素晴らしい人生の大半を子どもたちと向き合って過ごした。そして校長としてご活躍になった後に大学教員をなさっていた。今なお類まれな活力で、学部学生の成長を支援し続けている。A先生は「学習ボランティア」、B先生は「教員就職率」という言葉に、教育の夢をみている。

C先生とD先生はそれぞれ教育心理学・教育学の領域で研究に取り組み、学術的知見の蓄積に最前線で貢献してきた。もちろん大学教員として学部教員養成に携わっている。冷静かつ研ぎ澄まされた思考で、学生に有意義に働きかけている。C先生は「多様性の理解」、D先生は「テクノロジーを用いた教材の開発」という言葉に、夢を重ねている。

「実践」と「研究」という背景の違いこそあれ、夢を追いかける先生ばかりだったからこそ、気恥ずかしさも忘れて、思うことを語り合えた。

第2は（グループ対話の結論でもあるが）「実践」と「研究」との間に盛んな交通を生む、もっ

と頑強な橋を架けられないかということである。これは語り合いをとおしてメンバーがみることになった、共同の夢なのかもしれない。

教員養成をさらに豊かにすることをテーマとする対話の中で、浮上したキーアイデアは「学部学生教育に現場教員にも積極的に関わってもらふこと」だった。こうすれば学生は現場の香りを肌で感じ、学習動機を高められる。他方、自身の実践を振り返りながら責任をもって学生に教える行為は、現場教員にとっても成長の機会となる。

こんなことを考えていた時、学生と現場とを関わらせることは、「研究」のみを行ってきた大学教員には難しいと、C先生が発言した。現場との関係性が必ずしも円滑に構築されるとは限らないからだ。だから「実践」あがりの大学教員がいると話が早いのだと、A先生やB先生も言う。

でも語り合いの終着点はこうだった。本来、「実践」あがりではない「研究」あがりの大学教員であっても、学生と現場とを結びつけられるようになる（それが許される）べきである。そのためには「実践」あがりの大学教員、「研究」あがりの大学教員、（教育委員会なども含む）現場の3者の繋がり方が、今とは少し変化する必要があるかもしれない。

以上、心に残った2点を述べた。主観的に過ぎる感想になってしまったかもしれない（メンバーの先生方、お許しください）。しかしあの中で共有された数々の夢に誘発されて、大きな夢をみられたことに感謝している。

ラウンドテーブルB2に参加して感じたこと、考えたこと

東北芸術工科大学 創造性開発研究センター 講師・研究員 有賀 三夏

東北芸術工科大学 有賀三夏です。この度は、実践研究福井ラウンドテーブル2017・サマーセッションに参加させていただきありがとうございます。今回は私の課外授業「Art in Life」に関わる学生2名と福井大学に参りました。Art in Lifeの活動は「人生に芸術をどう使おうか？」を主題にしており、芸術大学の学生が自らの能力をどのように社会に貢献できるのか？を探究しております。学生達は、まず、自分の力はどのようなものか？を自己観察し、社会が今何を求めているのか？を調べ、社会に貢献できる活動は何か？を創作活動を軸としたワークショップを作成することで、自分達のみならず参加者の能力発見や育成などに関わる可能性の「場」の提供を目指しています。私達の大学は私立の芸術大学ですので、教養を学ぶための講義時間以外に、技術面の指導にも多くの時間を費やしております。大学には複数の学科コースがありますが、学生たちが自ら自分たちの学びを教育領域の場で発表する機会は希少です。当方では今回、企画にお声がけを頂き学生を選抜する際から大イベントとなりました。ポスターセッションのためのポスター制作準備の段階で、自分達の活動を可視化するチャンスを与えられた学生の使命感は大きく、普段の活動だけではなかなか気づくことができない部分を発見して探究している姿勢が見られました。ポスターという媒体は芸術大学の学生にとっては、ある意味で良く扱うジャンルのものですが、教育領域での発表におけるポスターの見せ方を考えるための機会にもなりました。参加学生以外の意見も取り入れながら、活動についてどのように説明したら、他領

域の方々に理解していただけるものができるのか、文章や言葉の選び方や、色の付け方、挿絵の付け方などにも学生たちなりに配慮しているようでした。このようにこのプロジェクトは福井大学での実践日以前から既に学習は始まっていたことを実感できます。そのような事前の準備があったからこそ、当日は他の展示や解説を注意深く巡検することができ、自分達の発表と他のグループと表現の仕方や説明の仕方を比べることによって、より多くの気づきを得ることができたようです。

私自身の参加として、課題の提起とテーマ別の話し合いは教員メンバーのグループに参加させていただきました。学生が学ぶ専門は違っても、大学という教育機関で学生達が身につけて欲しいことは共通していました。それは学生の間に「誰かのためにできることを学ぶ」ということです。学生達がその実感を持つ機会があれば、人や環境や、未来のために役立つ自己を形成でき、それが自己肯定感に繋がるのでは・・・と、グループの共通提案になりました。他にも、それぞれの領域の学生達が大学で学ぶことの重要性やそこに気づきを与える方法、導入の工夫を伺い、参考にしたものが沢山ありました。次世代を担う学生達が領域を超えて、多角的にお互いの学びの環境を考え合える機会は本当に貴重であり、必要なことだと思います。強くそう考えながらも、環境が整うのは難しいことですので、このような企画に参加させていただけたことを心より光栄に思います。ありがとうございました。

ZONE B2に参加して

福井医療大学 教授 森 透

Zone B2 のテーマは 2016 年 6 月のラウンドから開始して、今年 2 月のラウンドを経て、今回で 3 回目でした。テーマは学部で教員養成を考える、夢を語る、という内容で、全国の大学での地道な取組みにチャレンジしている先生方や学生たちに参加していただき、教員どうし、学生どうしで夢を語り合い、学び合うということをしてきました。今回の準備の段階では、知り合いの大学の先生方やフレンドシップ事業に取り組んでいる学生たちに声をかけてきましたが、まだまだ他に多くの大学の先生方や学生たちが日常の粘り強い取組みをしていると思います。今後も幅広く声をかけていきたいと考えています。

さて、私が参加したグループは神奈川大学の大関由貴先生と札幌市立札幌大通高校の能勢保幸先生、それと福井大学の小林和雄先生と私の 4 名でした。私は福井医療大学での養護教諭養成の取組みを報告しました。『教師教育研究』第 10 号に実践論文を掲載していますので、それをコピーして学部 1 年生の声を具体的に紹介しました。

大関先生は報告資料「領域を越えた協働の難しさにぶつかって一日本語教育をコミュニティにつなげたい」を配布され、日本語教師としての歩みを語られました。現在は神奈川大学の特任助教（日本語学習支援業務）であり、KEC 日本語教師養成課程非常勤講師です。大関先生は 1999 年からメキシコでの日本語学校専任講師時代から日本語を教え、また介護従事者への日本語研修も担当されてきました。そこでの問題は「外国人が日本語を覚えれば問題が解決する」と思い込んでいる介護現場と日本語教育界のあり方です。日本語の学習支援は「日本語教室」にいない、「日本語を学ばな

い」外国人留学生の声を聞くことであり、「日本語教育」は、他領域の人々の接点であること（ゼミを指導する教員、就職課、グローバル化・ダイバーシティを目指す大学・学部、日本人学生）が強調されました。大関先生が現在大変だと感じられていることは、①連絡・調整業務が急増、②変化する環境・状況への対応、③変化への対応が難しい組織や人の意識、④理解や協力を得るのが難しい（「日本語教師は、日本語教育をすればいい」という考え）、⑤関係者への気遣い、⑥時間はかかるが、なかなか報われない（カリキュラム（正課）に関わらない業務）、の 6 点でした。その中で分かってきたことは、自分の考えに「共感する人、ニーズを感じる人もいる」とのこと。「協働によって、それまで知らなかった人たちの立場や状況を知ることができる（組織や仕組み、職員、学生、他分野の教員、他の日本語教員）」ことも非常に大事であるとの報告でした。一人で孤立して取り組むことは非常に厳しいけれども、「仲間」がいること、共感しながら複数で取り組むことで元気付けられるということを語っておられました。

能勢先生はこの 4 月に札幌大通高校に赴任され、初めてラウンドに参加されたとのことでしたが、今まで札幌大通高校の先生方と生徒たちがたくさんラウンドに参加されたことはあまりご存知ないようでした。一番の関心は、大学の教育実習生が高校に来るけれども、どのような教員養成を大学で受けてから教育実習に来るのか、という問題関心があるとのことでした。教育実習生は授業のための教科の知識は多く持っていますが、高校での生徒の荒れや問題行動にはなかなか対応できないことが心配とのことでした。大学では教科の専

門授業だけではなく、子どもの状況を理解する授業も受けて欲しいとのことでした。グループでは最後にキーワードを紙に書き、教員の2つのグループで紹介しあい共有しあいました。

後半は、学生のグループに教員が入り、学生たちと率直に語り合う場を持ちました。私は能勢先生と探求ネットワークの学生、東京家政大学と中部大学の学生と一緒にグループでした。探求ネットワークの活動はよく知っていますが、他の2つ

の大学の取組みはほとんど知らないののでいろいろと教えていただきました。能勢先生も高校教師として学生たちに聞きたいことや話したいことを語っていました。短い時間でしたが、学生と教員と一緒に学び合う、共有することは大事だと思いました。最後に世話役の濱口由美先生が全体を見渡ししながら、いくつかのグループの教員と学生に感想を求めていましたが、とてもいい感想が出されたように思いました。今までの3回を振り返り、今後の方向性を考えていきたいと思っています。

学部の教員養成を考える、夢を語りあった ZONE B2

福井大学大学院教育学研究科 准教授 小林 和雄

Zone B2 のテーマは学部の教員養成を考える、夢を語るであり、全国の大学から集まった先生方や学生たちどうして夢を語り合いました。

最初の教員グループは神奈川大学の大関由貴先生と札幌市立札幌大通高校の能勢保幸先生、それと福井医療大学看護学科の森透先生と私でした。森先生から福井医療大学での養護教諭養成の取組みが報告されました。看護師の国家試験などに合格するための講義による知識伝達型の授業が中心であり、学生は黙々と教員の板書をノートに写すような授

育をすればいい」「海外の人々が日本語を覚えればよい」と思い込んでいる日本語教育界の教員が多いため、大関先生が日本語を流暢に話せる日本人を日本語研修会に参加させ、相互交流による生きた日本語の学びを生み出そうと試みた時、日本語教育の授業に日本人を入れる事への他の日本語教育の教員達の抵抗が予想以上に強く、なかなか上手くいかないということでした。

業が多いが、特性上仕方ない側面もあるかもしれない。少しでもアクティブ・ラーニングの視点を授業に入れていきたいが、孤軍奮闘中であり、なかなか大学全体で実行して行くには工夫が必要ということでした。

大関先生は神奈川大学の特任助教(日本語学習支援業務)、KEC 日本語教師養成課程非常勤講師として、海外から日本に介護従事者として来ている人々への日本語研修も担当されています。「日本語教師は、日本語が上手く話せない海外の人々に日本語教

能勢先生は大学から高校へ教育実習生が来たときに、教科の知識はあっても、それを上手く生徒に提示できず、授業をうまく進められないという現状を目の当たりにし、大学の教員養成で、どのような授業をして教育実習に来ているのかという問題意識をもち、大学の授業を見に行ったり、学生にインタビュー調査をしたりして、調べてきたことを報告してくれました。そこでわかったことは、大学では教科専門の知識の伝達に重点が置かれ、子ども理解

や授業方略については、あまり学習していないということに気づいたようでした。そこで、今回のラウンドテーブルに参加して、教員養成の大学でどのような授業を展開しようとしているのかの一端を学びたいということでした。高等学校の先生が、教育実習生の実態から、教員養成の在り方に問題提起していただき、改めて学部段階の授業の在り方について振り返る機会ができ、非常に参考になりました。

次は学生のグループと教員とのクロスセッションでした。私が入ったグループの学生は互いの自分が受けている大学の授業を聴き合う中で見いだ

したキーワード『主体性』の重要性に改めて気づいたようでした。劇に例え、主役は子どもたちで、教員は子どもたちにスポットライトをあてる役割に徹することで、子どもの主体性を伸ばすと表現していました。私が「具体的に授業でいうと何をする事なの？」と訊いてみたところ、「耳元でそっとほめてあげるとか、ご褒美シールをあげるとか、問題をかみ砕いて分かりやすいヒントをあげ、自分にもできそうだなと思わせることで」と具体的に答えることができていました。主体性の捉え方と伸ばし方に教育学の初学者の学生らしい素朴さを感じました。

ZoneB2 をつないできたキーワード

福井大学教育学部 教授 濱口 由美

ZoneB2 は、大学における教員養成に関わる教員とそこで学ぶ学生たちとで、これからの教員養成について考える広場である。立ち上がって間もない Zone であり、話題提供者となるシンポジストがまだ一人も立っていない Session 会場ではあるが、広場として少しずつ成長している手応えはある。手応えを感じさせるものは、会場全体の雰囲気もあるが、他者との協働作業となる「キーワード」を生み出す時間である。

前回の ZoneB2 における教員と学生のクロスセッションの場において、私は同じグループとなった学生から、「どうしても、キーワードとしてまとめないといけないのか。キーワードにまとめようとすると、報告してきた実践の良さや価値が消失してしまうような気がする」といった「疑問」を投げつけられた。学生の「疑問」に対し、的確な回答を示すことができなかった私は、学生の「疑

問」をそっくりそのまま全体の振り返りの場へと持ち込んだ。その「疑問」に対して、静岡大学の長谷川先生は、「それぞれの実践について聞き合ったこと・語り合ったことを、キーワードとしてまとめていく行為自体の意味を考えて欲しい。今回の話し合いで、自分たちは何がキーワードとしてまとめられたのか、まとめられなかったものが何だったのか整理できるのではないか・・・」といったメッセージを返してくださった。

今回、ZoneB2 の司会を担当していた私は、長谷川先生の言葉もお借りしながらも、私なりの解釈を加え「キーワード」にまとめることの意味を趣旨説明の中に加えてみた。しかし、私の中では「なぜ、キーワードにまとめるのか」といった「問い」はますます大きくなっていった。そこで、今回のセッションでは、「キーワードを生み出すプロセスはどのようなものであるのか」について

探るような視点も携えて、他大学からの参加者の皆様と共に「キーワード」を生み出す作業に取り組んだ。

グループでの「キーワード」を編み上げる時間。私のグループには、それまでの互いの取り組みや実践をじっくり傾聴しあうという時間とは明らかに異なる空気が漂っていた。まずは、報告を聞きあった中で見えてきた共通項や課題といったものが、具体的な言葉として提案された。次に、短いフレーズの中に並んだ言葉に対する吟味が始まった。一つの言葉に対しても、そこに至る背景・文脈・価値観等がそれぞれに異なるのである。故に、互いの納得を少しでも引き出せる言葉へと成長させるために、言葉と自分の関係性を吟味するといった感じであった。そして、互いの差異を確認しつつ、別の言葉への変換を試したり、自分の立ち位置を移しながら再考したりする「言葉のすり合わせ」へと入っていった。そのような思考のプロセスが生まれていたのが、私たちの「キーワード」をつくる時間であった。

「キーワード」を生み出すための「言葉のすり合わせ」は、「それでいいんじゃないの」といった妥協点を見つける行為とは明らかに違っていた。限られた時間の中で、他者の考えの背後にあるものを汲み取りながら、自分の根っこにあるものと対峙する行為といったら良いだろうか。それは、直感的でもあり、省察的でもある。そのような作業の後で、私たちのグループからまとめられた「キーワード」は、次のようなものであった。

「個人の夢・希望に寄り添える力」

「他者への感受性」

「誰かのためにできることを学ぶ」

画用紙に記された「キーワード」を改めて眺めると、これらがまさに「キーワード」編むことの意味のように思えてきた。同時に、次回への扉を開く鍵にもなる期待感も抱かせてくれるものではないか。

ラウンドテーブルを終えて

岐阜聖徳学園大学 教育学部3年 宮本 夏帆

初めて、福井大学のラウンドテーブルに参加させていただきました。普段関わることのない様々な大学の教授や先生方、学生との交流は、とても貴重な時間となり、教育に対する自分の考えの幅が広がったような感覚がありました。

ポスターセッションでは、私が取り組んでいるフレンドシップ活動について紹介しました。福井大学からも同じ教育の活動についてのポスターセッションがありました。そこで私が衝撃を受けた

ことが、安全面に対する考え方です。学生が子どもたちと活動するにあたって、安全面における責任は保障できません。そのため、安全面を考慮しすぎるあまり、企画の幅が狭くなることが多々あります。しかし、福井大学の活動はキャンプや調理活動など様々な企画をしていました。学生自身に怪我をした時の対処を判断できる力があるのだと感じ、それこそが必要な力だと実感しました。何よりも、その活動を理解してくださる保護者の

方との関係が確立されていることに素晴らしさを感じました。同じ学生の身でありながら、広い幅の企画を創り上げていることが、私にとって強い刺激となり、自分たちの活動をさらに良い活動にしていこうと思いました。

シンポジウムでは、学生4人、大学院生1人でそれぞれの大学での実践について語りました。やはり、どの大学も教員としての力をつけるために、学生のうちに様々な経験の積むことのできるプログラムが整えられていました。その実践の全てに共通していたのが現場の力です。私たちが普段大学で受講している授業では、学習指導案を書くことや、教授の経験談、現場での映像を見ることなどを通して、知識を得ています。しかし、語り合いの中で今の私たちに不足していると感じたのは、得た知識を教育現場で発揮する力です。そのためには、今の教育現場を自分の目で観て、関わることで知ることが不可欠です。机上での「聴

く」「覚える」だけではなく、「実践する」ことのできる実習は、改めて、今の自分自身の教員としての能力を痛感させてくれる場であり、成長できるチャンスなのだと考えさせられました。だからこそ、大学で整えられている実習プログラムには明確な目的をもって望むべきであると感じ、学びを不自由なく得ることのできる学生の間に力をつけていこうと思いました。他大学の学生との語りがあったからこそ、互いに自分の大学で経験している活動の価値を確かめ合えたのだと思います。

今回、ラウンドテーブルに参加させていただき、多くの視点からの考えを聞くことができました。教育に対して、学生から教授の方々までが熱心に交流している場に参加できたことをとても嬉しく感じるとともに、自分の目指している道がより誇らしく感じました。ありがとうございました。

福井ラウンドテーブルの様子や感想

岐阜聖徳学園大学 教育学部3年 奈良 茂樹

私たちは岐阜聖徳学園大学から来ました。岐阜聖徳学園大学では「フレンドシップ」という活動を行っています。大学近隣の小学1年生から6年生までを対象に、年間7回の活動を通して田植えやレクリエーション、科学実験や工作を計画して活動をしています。今回の福井ラウンドテーブルでは、岐阜聖徳学園大学のフレンドシップの活動を紹介する機会をいただきました。

自分たちの活動を説明する機会はほとんどなく、とても緊張して臨みました。フレンドシップの紹介

の時間には多くの人が訪れてくれました。私たちの話を真剣に聞いてくれて、話しているこちらをもっとフレンドシップのことを知ってほしいと思いながら、活動を紹介しました。「フレンドシップはいい活動だね」と言ってくれる声があり、改めて自分たちの行っているフレンドシップに誇りをもつことができました。また、同じように、他にもフレンドシップと似たような活動をしている大学がありました。私は主に福井大学の探求ネットワークの企画説明を聞きました。フレンドシップとは似てい

ますが、宿泊があるなど大きく違う部分がたくさんありました。またフレンドシップではできないことをやっていたり、たくさん相違点が見つかりました。フレンドシップでは危険とされていることも、探求ネットワークではその危険を工夫して行っていたりして、今後の自分たちの活動の参考にしたいと思いました。

次に、クロスセッションがありました。その中では教育における問題点を挙げて、その改善点を見出していくことをしました。グループは6人で、各大学でそれぞれ行っている活動の良い点と改善点をあげていきました。そうすると自然に課題がまとまってきました。例えば、子どもを叱ることです。私たちのフレンドシップでは、叱ることはほとんどしません。学生の意識として、学校とは離れた場所で活動するため叱ることができないということが第一だと思われます。そのため、叱られない子どもた

ちは好き放題やってしまい、危険になってしまうことも出てきてしまっていました。それは他の大学や大学院で実習を行ってる方も同じで、叱ることが改めて難しいと感じました。さらに、そこでは、問題点が保護者にもあるのではないかと考えました。モンスターペアレントにより、過剰にその叱りを批判されるのではないだろうか……。このような問題も挙げられました。

今回の福井のラウンドテーブルを通して、教育に対する問題点や改善点を共有し明確にすることができました。それを今後のフレンドシップに活かしていけそうです。このような交流は、教育者を指す人たちにとってはとても大切なことだと感じました。普段の授業だけではなく、さまざまな意見を交流する機会をもっと増やしていけたらよいと思いました。

H29 福井大学教職大学院ラウンドテーブルに参加して

富山大学 人間発達科学部 発達教育学科

学校教育コース 3年 坂下未来

福井研修では、とても多くの人の意見を聞くことができ、将来への不安がとても大きかったですが、少し安心することができました。私は、自分は教員になっていいのだろうか、教員に向いているのだろうか、大学では他の道が見えないがこのまま進んでいいのだろうか、などたくさんの悩みを持って福井研修に臨みました。ラウンドテーブルの際、他の大学の学生や院生の人と話し合いこのような悩みは私だけではなく、多くの人が持つ悩みな

のだということがわかりました。教員の負の部分だけを多く見ていた私でしたが、この研修を終えてそういうところばかりではないのだと感じました。大学の授業では教師が過労死したり、いじめられたりなどマイナスの部分を見ることが多いですが、他大学の教員の方々と話しているとそういう部分は見えず、教員同士で助け合い支え合っているという部分が多く見え、マイナスのことばかりではないのだと思いました。先生方のプレゼ

ンを聞いていると、教員みんなで学校を良くしようと思い、考え、悩み、実践するという場面が多く見られ、やりとげた達成感がすごくあるのだろうなと感じました。「教師はやりがい」ということを多く聞いていたけれど、そのやりがいは、子どもを成長させられた、子どもの笑顔が見えたなどのことはもちろんあるけれど教師同士で一緒に何かに取り組み、助け合いながらそのことを達成させるというようなこともやりがいに含まれるのだなと思いました。

このような、学生の思いを素直に伝えられる場というものに初めて参加しましたが、この大学でもこのような機会を作るべきだと感じました。他大学から呼ばなくても、同じ大学の学生同士で今どう思っているのか、話し合う機会があれば、他の人から刺激をもら

えて頑張ろうと思えたり、一度立ち止まって振り返る機会にもなると思いました。今は、探さないという場はなく私のような将来への不安があるような人は特に紹介されないと行かないと思うので、そういう人たちのためにももっと身近にもこういう場があればいいなと感じました。教師になろうか迷っている、悩みがあるというような人にはこのような機会はとても貴重なことであり、ぜひ参加すべきであると感じました。

私はこれから実習や教員採用試験がありますが、今回の福井研修を通して、たくさんの仲間がいること、たくさんの先生方に応援されているということがわかったので、手を抜かず一生懸命にやりたいと感じています。このような場に参加させていただいてありがとうございました。

H29 福井大学教職大学院ラウンドテーブルに参加して

富山大学 人間発達科学部 発達教育学科

学校教育コース 3年 戸島えりこ

1日目は、教員を目指している他大学のひとと各大学で行っていることを伝え合いました。富山大学では、1年次の頃から学級担任論という授業として定期的に小学校に行く機会があることや、子どもふれあい体験として学校外で子どもと関わる機会が設けられていることなどを紹介しました。他大学の学生からは、富山大学の講義の特徴や教育実習の数に驚かれることもあり、自分たちが貴重な経験をさせて頂いていたことを改めて感じました。同じグループにいる他大学の学生からは富山大学とはまた違っ

た活動が聞けてとても興味深く感じました。同じ教員免許を採るまでの過程でも、各大学によって異なりました。さらに、講義の組まれ方によっては採れるものも限られる場合があるという事も知り、大学毎の特徴がよくわかりました。各大学の活動を伝え合った後は、グループでまとめを行いました。私のグループでは、教師になるために学ぶ機会（講義・ボランティア・実習）などは公平に設けられるべきであり、さらに機会があるだけではなくそれに伴う

学生の意欲もないと学びが成り立たないのではな
いかという結論に至りました。

2日目は、現職の先生方と一緒にグループに入り
先生方の実践を聞かせていただきました。私のグル
ープは、特別支援教育に携わっておられる先生方が
何人もおられて、特別支援学校の免許を取得する予
定の私にとってとてもありがたく感じました。他県
の特別支援学校について知る機会はありませんなかつ
たので福井県の特別支援学校についても知ること
ができて良かったです。先生方の発表の後には、グ
ループで立場や専門に関係なく質問や感想を言い
合いました。同じグループの中には直接特別支援に
携わっておられる方ばかりではありませんでした
が、だからこそ違う視点から見て気になることや思

うことを話し合うことで、お互いにとって新たな気
付きや学びがあるのだと感じました。実際に各学校
で働いていると、他県の学校や自分の専門分野外に
ついては中々知る機会がないと思うので、このよう
な機会はどんどん取り入れていくべきだと思いま
した。また、先生同士のお話を聞いていると普段聞
けないような本音も知ることができて、とても興味
深く感じました。

2日間を通して、富山大学内だけでは気付かない
他大学の特徴や富山大学の良さに気付くことがで
きました。また、同じ夢を持つ他大学の学生や現職
の先生方とお話しさせていただくことを通して、自
分のこれからについてももっと深く考えるきっか
けになりました。ありがとうございました。

H29 福井大学教職大学院ラウンドテーブルに参加して

富山大学 人間発達科学部 発達教育学科

学校教育コース 3年 朝倉 希実

今回、福井大学ラウンドテーブルに参加したこ
とで同じ学校教育という分野に携わるいろいろな
立場の方々とお話をする貴重な機会を得ることが
できました。自分たちと同じように教育について
学んでいる他大学の学生達の活動や意見を聞くこ
とは初めてだったこともあり、とても刺激にな
り、これからまたより多くのことを学ぼうという
気持ちが高まりました。

1日目の学生同士でのラウンドテーブルでは他大
学の特徴的な取り組みを聞き合うことで、自分の
大学でのこれまでの授業やカリキュラムの意味や
価値に改めて気づくことができ、それが自分の自
信にも繋がりました。また、同じ教員を志す学生

同士でどんな教員になりたいかや、教育に大切な
ことを話し合うことで、自分だけでは思いつかな
いような考えや多面的な見方からの意見を聞くこ
とができ、自分の考えが広がりました。

2日目のラウンドテーブルでは様々な校種の現
職の教員の方や他大学の教授と、違う立場から話
し合いに参加させていただき、学生同士で話し合
うのとはまったく違う、活動等に対するより深い
考察ができました。特に、現職の教員の方々の実
際の現場での実践を聞いて、その意図や子どもと
の関わり、反応なども知れて、将来、自分が授業
を考える際に必要になる観点も知ることができま
した。

このラウンドテーブルのように様々な大学や学校から集まった面々で1つのことについて話し合うのは初めての体験でしたが、参加してみると、同じ目標を志す学生や自分の目指す先にいる先生方と話し合い、自分になかった意見や知らなかった知識を知ることとはとても刺激になり、自分の目標への決意も強くなりました。また、この2日間、少人数での話し合いを続けたことで、自分の意見を明確にもち、人に伝わる話し方をする大切さや難しさを感じました。自分の意見を持つためには話者の意図を組み、自分なりに整理しながら考え

をまとめるということを短時間でしなければならぬので常に思考をフル回転させなければいけませんでした。それはこれから必ず必要になる力であり、自分にとって弱い部分であるということも自覚していたので今回がそのトレーニングにもなったと思います。この二日間のラウンドテーブルを通して、様々な実践や意見、考え方に触れ、教育にとって必要なことは何か、自分が目指す教員には何が求められるのかを改めて考えることができ、参加して良かったと強く感じました。

ラウンドテーブルB2に参加して感じたこと、考えたこと

東北芸術工科大学 2年 田中美槻

私は、山形県にある東北芸術工科大学 2 年生です。大学ではグラフィックデザイン学科に所属し、ポスターなど平面のデザインを制作する技術を学んでいます。また、学科の授業や他の座学の傍ら教職課程を取っており、高校の教職免許取得を目指しています。

今回の福井ラウンドテーブルに私が参加したのは、東北芸術工科大学にある「Art in Life」という有賀三夏先生が顧問を行う活動に参加する一員として、体験や学びをお話するためでした。ラウンドテーブルが始まり、私たちのポスター発表の時間になると、ポスターに興味を持った周りの方が集まってきました。私たちの発表は、有賀先生が「Art in Life」が「多重知能理論」や「芸術思考」に基づいた活動をしていることを中心にポスター全体の内容をお話しました。その後、実際に「Art in Life」で活動する学生の発表として、4年生の学生と私が今までの体験や学びについて発表

しました。私は、「Art in Life」で行う子ども達のためのワークショップについてお話ししました。

「子ども達の学びになるワークショップ」を意識していることや、それを実現するために「多重知能理論」「芸術思考」に基づきながらワークショップの内容を考え、「Art in Life」が他で行うワークショップとは異なる過程を経ているという内容でした。

ポスター発表後の「クロスセッション」の際に、私の加わったグループは、私以外の方が、大学で教育のことを学びの主軸にしている方々で、私は美術大学に通う自分が場違いなんじゃないかとも思え



Art in Life ワークショップを説明する伊藤さん

てしまいました。自己紹介の後に、各学生自身が学んでいることについて発表し合い、私はポスター発表で行ったような「Art in Life」の活動についてや「多重知能理論」「芸術思考」のことを発表しました。その際に戸惑ったことは、美術大学で日常的に使える表現が使えないことでした。また、他の方の「教育」や「教職課程」についてのお話しに私がついていけないこともあり、美術大学で自分の学科の学びの傍ら「教職課程」を学ぶ程度では、教育者の知識として足りていないものがあるのではと思えてしまいました。しかし、その後の発表後に「理想の先生」をグループで考え、私たちは「生徒に寄り添える、人間味のある先生」に意見がまとまりました。そして、生徒への寄り添い方として、美術を主に学んできた先生の方が美術好きな生徒には寄り

添うことができるのではないかと考えていただき、私がそれまでに抱いていた「美術を主に学ぶ傍らで、教師になろうとするのは正しくないのでは」という不安を払拭することができ、身になる話し合いができたと思います。

私は2日間のラウンドテーブルで学生同士のセッションや、実際に教壇に立つ先生方とのお話し合いにも参加しました。その中で他の方の発表を聞くと「Art in Life」や自分が学ぶ教職課程で活かせる、子どもとの接し方、教育に向き合う時の姿勢などを学ぶことができました。普段、美術大学にいただけでは会うことのない方々と意見交換をすることができ、自分の視野を大きく広げる機会になりました。

ラウンドテーブルの感想

福井大学教育学部初等教育コース2年 河合 彩名

6月25日に実施されたラウンドテーブルに参加し、違う環境の人々の学びを知ることができ、教職について考える際、新鮮な気持ちになった。

私が参加したのは、研究発表と、様々な大学の人々が集まる話し合いである。

研究発表は、大学内に研究内容を記載したポスターを設置し、それを多くの方々に破票する場である。聞き手の方々は自由に聞きたい発表のポスターへ移動することができる。その取り組みでは授業で参観した幼稚園の物的環境について述べた。幼稚園の構造が、子どもたちの心身の発達に寄り添うように設定していることに着目した内容だったが、反省点は人的環境の内容を多く話すことができず、発

表を聞いてくださる方に具体的な事例を伝えられなかった点である。相手に参観の様子や、子どもたちが紹介した環境の中でどんな行動をしていたかお話しできればよかったと感じている。しかし、聞いてくださった方から自分が体験している幼稚園の様子などのお話を伺うことができ、自分たちの活動の意味を捉えなおすきっかけになった。その場で相手から反応を頂けることや、質問、新たな経験を聞くことができることは、この研究発表の醍醐味ではないかと感じている。

話し合いの参加は個人としては二回目になるのだが、集まっている方々は教職に関わっていることを軸に、年代も学んできた経験量も異なるため、と

でも緊張した。今回、グループの話し合いを進めるための進行役を任されたため、席に着いたときは緊張、不安、焦りで固まってしまっていた。しかし、前回のラウンドテーブルの話し合いの様子を思い出そうとしたこと、現在周りの人たちが和やかに談笑していること、雰囲気が緩やかだったこともあり、序盤でなんとか緊張をときほぐすことができた。初めての参加の人も緊張しているかもしれない、とグループメンバーに自己紹介を促してみたところ、自己紹介が進むにつれだんだん話す雰囲気がつかんでいったように感じ、進行役の役割の大切さを感じた。

この話し合いの最大の特徴は、話す側、聞き手側が常に変化していく点であると考えている。相手に伝える、相手の話を聞き質問したりなど、自然と役割が変化するため、より自主的に話に参加できるのではないかと感じた。

私が今回同席させていただいたメンバーは、長崎大学、中部大学、富山大学、福井大学の方々である。グループでは資料や電子端末を見せ合いながら発表を行った。話を伺って聞いて驚いたのは、大学ごとの取り組みの特色などである。それぞれ独自の取り組みがおこなわれており、カリキュラムの内容や、学部編成にもさまざまな種類があり、当たり前であるかもしれないが、教育学部でも行われていることがこんなにも違うのだと実感した。

インパクトがあったのは長崎大学の参観の心得についてである。わたしは授業で行ってきた幼稚園参観の概要をグループの人たちに説明した際、「私の学校では、あなたは道端の石だ、と思いながら参観してくださいと言われたんです」と長崎大学の方が反応してくださった。学校の方針から、参観方法にも影響するのかと驚き、主体的、客観的に行う参

観のメリット、デメリットについて考えるきっかけになった。

富山大学では、実践の場に飛び込むのが早く、一年生のときから学校に取り組むらしい。実践の場から学んでいけるのは素直にうらやましいと感じた。しかし、何も知らない状態で教壇に立つのは怖くないのか、と聞いてみると、実践から学べることも多いが、不安であるし、座学で教えてもらってから実践に向かいたいという思いもあるそうだった。しかし、座学と実践で間が空きすぎてしまうと、折角学んだことを忘れてしまう。何とか調節出来ないのか、という意見も多かった。

中部大学ではフレンドシップ活動という、福井大学の探究ネットワークのような活動が繰り広げられており、学生が主体となって動く半面、反省が生かしきれない、どう運営していけばよいか考えているとお話しされていた。学生としてではなく、すでに社会人としての力も求められているように感じた。

話し合いを通して感じたことは、いかに学ぶ機会をより充実したものに変換できるか、ということである。グループ内で、「絶対に教師になる」と決めて教育学部に入った人はいるか、という質問をしてみたのだが、皆紆余曲折の末に教育学部にたどり着いていた。しかし、きっかけが何であれ、学びの機会を得られたことは転機になる。問題は、その機会をどう生かし、糧としていくことではないのか、と様々な学習や報告を聞いて感じた。

多くの人と意見交換ができ、とても良い経験ができたように感じる。

ラウンドテーブルでは、多くの人と関わる楽しさ、学びの広がりを感じることができた。ここで学んだことをしっかり頭の中に刻んでおきたい。

Zone C コミュニティ

何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか

福井大学教職大学院 准教授 半原 芳子

Zone C は福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、福井駅前の AOSSA を会場に行われ、Zone C らしい町中での開催となりました。

今回は、「何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」と題し、メンバーやスタッフ、構成員が入れ替わる中で絶えず発展を続けている取り組みに焦点を当て、そこにどのようなコミュニケーション構造があるのかを長期に渡り続いている組織や実践、具体的には福井市旭公民館で 28 年続いている地域の子供たちによる水質調査の活動と、福井大学で 22 年続いている探求ネットワークの事例をもとに探りました。今回は同テーマを引き継ぎつつ、コミュニティの持続的な発展のためにコミュニティ外のメンバーとどのように出会い、そこでどのような調整が働きコーディネートが行われているのかを考え進めるため「異質との出会い」をテーマに、世代や立場を超えた多様なメンバーと実践の検討と交流を行いました。

まず、Session I ナレッジ・フェアでは、福井市・越前市の公民館、ふくい市民国際交流協会、福井大学探求ネットワーク、そして学校と地域の連携に関心をよせ調査等を行っている福井大学の学生達の取り組みがポスターによって交流されました。その実践を行っている本人に気軽に自由に質問ができるナレッジ・フェアは、その名の通りナレッジ（実践者の知恵）がなごやかに交流される時間となりました。

Session II シンポジウムでは、福井市殿下公民館主事の堂下未来さんと、同地区（殿下地区）にて地域おこし協力隊として活動している高橋要さんをシン

ポジストに迎え、コミュニティ外の視点で殿下地区の発展に尽力されている高橋さんと、高橋さんを自身のコミュニティのメンバーとして迎え共にその発展に取り組もうとされている堂下主事の取り組みを聴くことができました。高橋さんからは地域おこし協力隊として殿下地区にて活動を始めた際全住民のポストに自己紹介文を投函していったこと、住む以上は住民の一人であり住みながら共に何かをやることを大事にしていること、そしてもとは空き家であった自宅が今や多様な年齢の人達が集まる場所になっており、そこで新しい動きや活動が生まれ始めていることなどが紹介されました。そうした高橋さんの活動や地区の動きを、高橋さんと共に活動しながら支えている堂下主事からは、ご自身も高橋さんに支えられ多くのことを学んでいること、地域を再発見できていることが語られました。参加者はお二人の取り組みを、それぞれ自身の組織やコミュニティを思いながら受け止め、様々なことを考えたと思います。

Session II の提起を受け、Session III フォーラムでは約 100 名の参加者が 5～6 人のグループとなり互いの実践を、じっくり時間をかけ交流し合いました。フォーラムそのものが「異質との出会い」であり、そこで交流される事例もまた社会教育、国際交流、学校教育、行政、企業の取り組み等多様で、今回の Zone C のテーマを体現するものでした。最後は Zone C ではお馴染みの光景ではありますが、参加者みなで会場の片付けを行いました。自分達の学習の場を自分達の手で整えるというのは、実は大事なことだと思っています。

ラウンドテーブルに参加して

越前市南中山公民館 主事 辻岡 秀美

今年度南中山公民館は、4月から着任の新館長、他館から定期異動してきた相方主事との新体制でスタートしました。以前の自分なら、あたふたしながらただ仕事をこなすだけだったと思います。でも昨年1年間、履修証明プログラムを受講させていただいたおかげで、違和感なくスムーズに新体制の流れの中に入っていくことができました。私の中で、何かが植えつけられていたのだと思います。それは、ラウンドテーブルでも同じことでした。

一日目、当日突然受付で“報告+F”の仕事を投げかけられた時、一瞬の驚きはありましたが、なんとかなるさ！と、特に動じることもない自分に自分が驚きました。

シンポジウムのテーマにあった【異質との出会い】。越前市の主事は住居区ではない区に配属されますから、ある意味異質人です。でも外から入る

異質人ならではこそ、住んでいる方々にはわからない良さが見えるものです。無い物ねだりではなく、有るもの探しのお手伝いが出来たならとつくづく考えさせられました。

小グループでの話し合いは、昨年度2回のラウンドテーブル同様、とても有意義なものでした。私は、小学校の先生や社会人1年生の市職の方、そして探究ネットワークの学生さんとの時間共有でした。日頃公民館では顔を合わせて話すことが出来ない方々に、公民館事業の産みの苦しみや継続の難しさ等々を聞いていただきながら、課題解決の糸口を探らせていただきました。はからずも未熟者のファシリテーターのグループになってしまった皆さん、ごめんなさい。私だけが、勉強をさせていただいたのかもしれませんが。

次回冬のラウンドテーブルも、緊張感がある中で少しでも楽しめる余裕があればと思います。

ラウンドテーブルに参加して

京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治

筆者は、「住民参加のまちづくり」の援助を産業としている。「住民参加のまちづくり」とは、まちの課題の解決に資するような、まちの共有財産を、そのまちの住民自身の手で作りにあげていくプロセスとして説明できる営みである。

こうして説明すると簡単に聞こえるが、実際やっていくのは簡単ではない。とりわけ困難なことに「まち」というのは、背景も価値観も異なる、全然知らない他人同士が集まって住んでいるという点である。もっとも、そのこと自体は「多様性」と「コラボレーション」を尊ぶ社会通念から

見て、豊かな可能性を備えた、理想的土壌の特徴であるように思われる。しかし、多様性は新しい価値を生み出す十分条件とはいえない。

例えば、価値観の異なる他者とでは、何かまちに資するような協力行動をしようにも「こんなことをしたら怒られるのではないか」「誰かを傷つけてしまうのではないか」「否定され、立場を悪くされてしまうのではないか」「うまく騙され、搾取されてしまうのではないか」といった不安がつきまわってしまう。この不安を、エイミー・C・エドモンドソンは「対人不安」と呼んだ。この「対人不安」ゆえに、人々は自分の持っている経験や資源、悩みや不安といったものを自己開示せず、隠匿してしまう。そうするとますます人々の間で没交渉と無関心が生じ、さらに対人不安が強化されるというフィードバック・ループが生じてしまうことになる。この対人不安を解消し、まちの人々が十全に力を合わせられるようになるまでには、容易に想像できるように、膨大な時間や労力が必要になってしまうことだろう。そのコストに尻込みすれば、人々はまちづくりという営みから離れていくことになるだろう。

それに対してラウンドテーブルという場は、まったく見ず知らずの人々が、「はじめまして」で出会い、長くて数日、短ければ数時間だけ、共に時間を過ごす場にすぎない。にも関わらず、そこで交わされる対話は実に刺激的で、自分の体験に結びつけることで、次の一步につながるような新

しいアイデアや、これまで解決できなかった課題解決のヒントが得られる、大変有意義な場であるように感じられる。そうであるがゆえに、リピート参加する人も少なくないと聞く。まさに、多様な他者との対話と、それによる新しい価値の創出という、まちづくりの現場が求めてやまない理想的状況が立ち現れているのではないか。

当然、このような状況は放っておいて出現するわけではない。キーになるのは、ファシリテーターの存在であるように思われる。見ず知らずの他人が、わずか数時間で、深く繊細な部分まで自己開示し合い、表面的でない意見のやり取りを成し遂げられるのは、他者との対話が、当事者を損なうような事態が発生するのを周到に回避したり、万が一トラブルがあった場合には対策を打ってくれたりするであろう、ファシリテーターという場を作る専任者への期待と信頼ゆえであるように感じられる。

しかし、まちの現場には、このような訓練されたファシリテーターが専任で存在する場合は稀である。その意味で、ラウンドテーブルは、訓練されたファシリテーターという希少な財を使い、「多様な人が集まる場」という、困難だが可能性に満ちた状況の楽しさを存分に味わえるという、非常に贅沢な場であるということができるだろう。このような贅沢を楽しむ機会に接することができた筆者の喜びが、本稿の読者に少しでも伝わるならば幸いである。

「異質」をどう捉え、どう活かすか ―福井ラウンドテーブルに参加して―

早稲田大学 文学部教育学コース3年 芝田啓悟

6月24・25日の二日間、私は福井ラウンドテーブルに初めて参加しました。初日は「Zone C コミュニティ 何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」に参加し、福井大学の教育学部生と小グループで実践の交流を行いました。二日目には、中学校の教頭先生と副校長先生、福井大学院生らと実践活動報告を行いました。

今回、福井ラウンドテーブルで私が一番印象に残ったことを感想として書こうと思います。初日に参加した「Zone C」の中で「異質との出会い」をテーマに、殿下公民館の主事さんを務める堂下未来さんがコミュニティの持続的な発展のためにコミュニティ外のメンバーとの出会いをいかにコーディネートし、活かしていくのかを、地域おこし協力隊の高橋要さんと話し合ったシンポジウムが一番印象的でした。異質な存在がある既存のコミュニティに加わった場合にどうなるのか、また既存のコミュニティの持続的な発展のためには異質な存在の介入が必要不可欠なのか、このシンポジウムのケースの人材、地域環境等が揃ってこそ成立したのか、など大変興味をそそられるものでした。基本的に異質な存在であるということは、浮いてしまい煙たがられるようなネガティブなイメージを我々は抱きがちですが、異質だからこそその強みや新しい視点があり、それが持続的な発展を促していたのだと思います。具体的に私が重要だと感じたことは、コミュニティ内の雰囲気作りでした。地域おこし協力隊の方は率先して住民と交流する場を作り、ざっくばらんに語ってもらい、住民の熱い思いや具体的なビジョンを引き出して

いました。おそらく初めの頃はお互いに敬遠することもあり、苦労されたこともあったと思います。しかし、お互いのこのコミュニティをどうにか発展させたいという熱い思いに気付き、交わったからこそコミュニティの持続的な発展に繋がったのです。その「気付き」の場・語り合える雰囲気作りが第一歩なのだと感じました。

私は現在、大学のゼミで幹事をしています。ゼミの運営とこのシンポジウムのお話をリンクさせ、「学び合うコミュニティ」をどう持続的に発展させていくのかを考えた時、「異質」の捉え方を変化させ、排他的な雰囲気を作らない場を作る事が重要だと考えました。既存のゼミ生から見れば、新規のゼミ生は異質かもしれません。しかし、既存も新規も関係なく、各々がバックグラウンドや思想を抱えています。つまりゼミ生全員が「異質」だと捉えられると思います。この「全員が異質」である状況を十分に活用し、発展に繋がられる場・雰囲気をどうコーディネートしていくのか、できているのか、省察も交えて模索しようとして強く感じています。

福井ラウンドテーブルでの実践報告を振り返った時、報告者による新たな視点に気付く楽しさもありましたが、自分が報告する中で省察することの重要性を感じました。自分の実践にどんな意味があったのか、何が足りないのか振り返って考える大変有意義な機会だったと思います。また実践経験を積んでSpring Sessionsに参加させて頂きたいです。

Zone D 授業研究

「実践し省察するコミュニティ」の意味

東京都板橋区立赤塚第二中学校 研究主任 中野英水

1 福井大学と本校とのつながり

「東京の公立中学校がなぜ、福井大学と？」という疑問をもたれる方も多いが、福井大学と本校とのつながりは平成23年にさかのぼる。当時、板橋区の教育改革の中で本校の校舎全面改築をする際に、教科センター方式を導入することが決定した。生活指導的な課題の改善に向けて継続的な努力を重ね、ようやくその成果が表れてきたという当時の学校現場としては、「教科センター方式って、何？」「また、生活指導が大変になるのでは・・・」といった不安に襲われていた。そうした不安と改善に向けての模索の中で先進的な教育理論と実践をもち、教科センター方式についても進んだノウハウをもつ福井大学とつながることになったのである。そして、現在は東京の拠点校として板橋区の教科センター方式や教育改革をリードする学校となったのである。

年間を通じて、本校と福井大学とのつながりはたくさんある。まず大学からは、ほぼ毎月行われる本校の校内研修会に教職大学院准教授の木村先生、半原先生においで頂き、たくさんのアドバイスを頂いている。また、年3回の授業公開では、ご講演も頂き板橋区内をはじめ、多くの教育関係者に赤塚二中での取り組みや最新の教育情報をお話し頂いている。そして、福井ラウンドテーブルへの参加は、新たな教育情報や日本各地のさまざまな実践を知る場ではあるが、それを通じて本校の取り組みを振り返る機会となったり、これまでの取り組みを再確認・再理解したりする省察の場としての意味が大きい。

2 2017 Summer Sessionsに参加して

今回はZoneDに参加をしたが、そこで発表された生徒の主体性や協働的な学習形態を学校全体でつくりだすことが授業改善そして学校改革

の基本であることは実感を伴って共感できた。SessionⅢでの発表では、生活指導と学習指導との関連について話題となり、その一体化（授業改善が生活指導的な課題の改善につながること）の重要性が挙げられたが、この点も本校での実践と共通する部分である。ここには話を聞きながら自身の実践を振り返る自分がいた。シンポジウムは省察のためのきっかけであるように感じる。そして次のフォーラムでは実践を語る場も用意されており、語りと傾聴がうまく調和している。

日曜日は、時間をたっぷりとかけおこなう「語りと傾聴」の場である。私が参加したグループでは県内の小学校に勤務するベテランの研究主任の先生が取り組む研究推進の話と、金沢市のある商店街活性化地域力向上を地域交流で実現しようという取り組みを実践した話を聞いた。こうした話を聞いていると立場や状況は違えども、自分の立場に還元できるヒントがたくさんある。ラウンドテーブルは実践を語ることも大切だが、それ以上に傾聴することの大切さを毎回実感する。長時間ではあるが、学びが詰まった素晴らしい時間であると毎回感じている。

福井ラウンドテーブルは毎回「実践し省察するコミュニティ」と大きく掲げている。この場に来る人々は、みな実践者ばかりだ。例えばポスターセッ

ションで実践を語ると、必ず深い質問が返ってくる。聞き手が実践者だからであろう。そして質問に答えながら、自分が自分の実践を省察していることにも気づく。ここにも「語りと傾聴」があるのだ。このような「語りと傾聴」の場面が、あちらこちらにあるのが福井ラウンドテーブルなのである。講演を聞いて自分の学びとするのも素晴らしいが、これ

では一方向の学びだ。これに対し、福井ラウンドテーブルは双方向の学びである。実践者が語ることで省察する、実践を傾聴することで自分の実践を省察する、そして福井から戻ってまた実践する。この実践と省察とをつなぐのが福井ラウンドテーブルであり、「実践し省察するコミュニティ」としている意味なのであろう。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

和歌山県立みはま支援学校 江川 寛

「今の充実なくして将来の充実はない…」今回のラウンドテーブルを通して、私の心に強く残ったフレーズです。心に残るというよりは、ガツンと身体中に響いたというほうが正しい気がします。この言葉がなぜ心に響いたのかを自分なりに意味付けし、今の自分ができる範囲で言語化してみたいと思います。

「ZoneD 授業研究」で特別支援教育に関わる者同士で話し合ったときでした。重度重複障害児に関わられている方から「障害が重い方に関わっていると、将来を見据えて支援したり、将来の姿を描いたりしづらい」という悩みが打ち明けられました。この悩みをベースに私たちのテーブルでは「どこに向かって支援をしているのか」について語り合いました。語り合いの中で出てきた言葉が「今の充実なくして将来の充実はない」でした。

私は、これまで知的障害の方々と病弱障害の方々に関わってきました。知的障害児者に関わっているときには、将来の生活を見据えて今何ができるかということをよく考えました。授業や個別の指導計画の目標を考えると未来形の目標を立てることが多かったと記憶しています。病弱支援学校へ異動してからは、命のタイムリミットが私たちと比べて短

い方と出会いました。これまで知的障害の特別支援学校で立てていた未来形の目標がしっくりこないと思うことが多くなりました。そこで、当時の校長先生に「命に制限のある方に対して、未来形の目標を立てることは難しいです。そんな方に対して教育ができることはあるのでしょうか?」と尋ねてみました。校長先生は「誰にだって命に限りはある、それが長いか短いかの違いがあるだけ。今、今をしっかりと生きることを支援するのだって立派な教育の目標だと思う。人と人との関係性の中で今を生きる。立派なことだと思う。」と答えていただきました。私は、このときに、目標は未来形だけではなく現在形のものもあるのだと気付きました。ただし、当時の私の中で、しっかりと整理できたものではありませんでした。

今回、ラウンドテーブルで聞いた「今の充実なくして将来の充実はない」という言葉は、前述の校長先生の話とリンクするものでした。だから、私の心にガツンと響いたのだらうと納得しました。今後実践を積み重ねていく中で、この言葉の捉え方は変わっていくのではないかという思いもあります。今回のラウンドテーブルでは、自分の内にある様々な疑問について改めて考える機会を頂いたように思います。ありがとうございました。

Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

＜省察の連鎖＞

一宮研伸大学看護学部 助教 肥田 武

福井ラウンドテーブルに初めて参加した。きっかけは2つあった。第1は、大学院以来の友人（今は大学教員である）が「省察的实践」の研究をしていることだ。第2は今年出会った同僚（大先輩）がお勧めくださったことだ。「不思議な縁だ」と感じながら福井に着いた。

さて充実した時間を過ごさせていただいた2日間の終盤（セッションⅣ中）のことである。ファシリテーターの先生のお人柄が生み出したのであろう、優しい空気。その中で福井大学の学生さんが語ってくれている。僕は心地よく耳を傾けている。テーマは「探求ネットワークでの学び」。探求ネットワークとは、長年の試行錯誤を経て福井大学に根付いてきた、きわめて独自性の高い科目であるらしい。そして、これを比類ない優れた学習プログラムにしている、中核的要因はおそらく「学生主体」を貫いていることなのだろう。そう僕に感じさせたのは、語ってくれる学生さんの、安心して満ちた笑顔と誠実な言葉だ。自らの取り組みを、そこで経験したことを、そこで感じたことを、躓きや葛藤も隠すことなく穏やかに語る姿からは、「この学び方でよいのだ」という彼女の確信が伝わってきた。この人はよい教師になるのだろうか。

そう感じながら、今度は自分の仕事のことを考えていた。僕はこの4月から看護大学に勤め、「教養ゼミナール」という科目の取りまとめ役をしている。これは看護師を目指して入学した新1

年生を、少人数グループに分け、それぞれに1名の教員を割り当てる。各教員は担当する学生たちの世話役となり、学生にとって初めてのレポート執筆作業を支援する。いわゆる初年次教育プログラムだ。ただしこの科目は昨年度まではなかったため、皆が手探りで進めている。ゆえに学生も教員も各々、不満や葛藤を抱えているようだ。「1度、担当教員全員で集まって感じていることを共有し、次年度のあり方を考え直す場を持ちましょう」と、福井に来る3日前に決まったところだった。僕は取りまとめ役として情けない気持ちでいた。でも福井で探求ネットワークの話を聴きながら覚悟できた。皆の不満や葛藤と向き合おう、入ってきてくれた新1年生の希望を挫きたくない。

僕は「省察的实践」という概念を理解してはいない。しかし誰かが実践を省察する語りを聴き、僕は自らの実践を省察せざるを得なくなった。そして、なぜか分からないが「僕もがんばろう」と思えた。たぶん通常の語りでは、人に明かさないはずの話題を開示することで、何かと向き合う一歩を踏み出せるからではないか。ピント外れかもしれないが、僕はそんな体験をし、そんなことを感じた。僕にとっては有意義な2日間だった。

最初は縁に導かれて、偶然参加することになったと思っていたけれど、それだけではなかったのかもしれない。自分の日々の悩みと向き合うきっかけを僕は探していたのかもしれない。また参加したいと思った。

質の高い福井ラウンドテーブル

さくら認定こども園 伊藤 仁美(学校改革マネジメントコース)

「先生、ラウンドテーブルに参加して本当に良かった。とても楽しかったです。他の先生に話を聞いていただくって何ていいのか。どの先生もとっても温かく聞いて下さるし参考になるし、良かったあ。本当は心臓飛び出るかと思っていたのに、今は次回も参加したいと思うくらい。学校が違っても悩みは同じなんですね。」

同じ職場の2名の主幹保育教諭が、今回報告させていただきました。会場を出てきて直ぐにこの生き生きと発した言葉が返ってきました。四角いテーブルで、他校種あるいは他職種がグループワークするわけですが、1日過ぎてふっと我に返った時、「ああ、心地よかった。別世界に1日居て、真剣に3人の実践報告について考えた。」という充実感で心満たされるのです。これこそ、真の丸い「ラウンドテーブル」の意味なのだと痛感しました。思えば、去年参加された、幼稚園の教頭先生も、当園の園長も今回は自主的に然も当然のように参加していただき、人の輪の広がりを痛切に感じています。

報告者は与えられた時間内に実践や疑問悩み等を整理し、今後の課題や考察をつけてまとめますし、参加者は人の意見発表をまるで自分の事のように真剣に悩み助言し、そこから報告者も参加者もそれなりに気付き次へのステップになっていきます。この感動が次々伝わっていつているのがこの2日間で手を取るように感じました。

私は1年しか参加していないのですが、色んな会場で再びお会いし、「あらお久しぶりです。」「あ、先生に教えて頂いたポートフォリオを取り入れてすごよかったです。」「公開研に参加でき、ありがとうございました。」等々縁が縁を生んで笑顔が広が

学び合い次への意欲に繋げるのも、このラウンドテーブルの良さだと思います。

・ZoneD 授業研究 子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

3人の先生方のシンポジウムから、遊びの中の学び、授業の中で見とる、しゃべらない子を見とる、などこれからは表出した言葉だけでなく生徒の様子を見取って学びを高めながら繰り上げていくことをしていきたい。分からない時、どうしたら聞き合えるのか本物をしっかり子どもに繋げて教員がモデルになるといいという言葉が胸に響きました。

・美浜町せせらぎ保育園の発表

美浜町の各園が事例発表し合い、学びについて物語る、エピソードを分析して発信したり、保護者総会時に説明したり、町全体で接続研修をずっと続けているそうです。そして、振り返りというのは座学の始まりですよ、と教えて頂いたという事で、振り返りを大切にしていました。

・クロスセッション

福井大学探求ネットワーク、紙漉きブロックからの報告。年間のテーマがあり、四季に分けて活動。子ども

の目標、スタッフの目標を立てて運営していました。2年目は子どもを主役としてとらえているがそこが一番難しいという課題でした。学校ではないのに、児童生徒が休まずコンスタントにやってきたいと思う内容と創意工夫に感心しました。

信州大学附属特別支援学校の報告。Aさんをしっかり行動観察。保護者と連携を取りつつサポートサービスから情報をもらう。個別の支援会議・教育

相談による話し合いを増やす。主体的に活動できる場面を増やすことがすごく効果的であったということです。

以上が私のラウンドで学んだ気付きです。人から与えられるのを待つのではなく、私から人の出会いに感謝して今後も切磋琢磨し、学び続けていきたいと強く思った2日間でした。

「ラウンドテーブルに参加して考えたこと」

群馬県立二葉特別支援学校 南雲敏秀

私は、教職に就いてから毎年ラウンドテーブルに参加しており、毎回、子ども達とのかかわり合いの中で起きた出来事やそこで得た学び、私自身や同僚性の変容などを整理し、レポートにして報告してきた。これまでのレポートを読み返し、過去の実践を思い起こすと、恥ずかしくも情けない気持ちにもなるが、その実践が私の中で、今まさに子ども達とかかわり合うときの範例として存在している。ただし、その範例は、単に経験したことでつくられてきたものではなく、範例となる過程には、省察的な実践の語り合いや実践の編み直しの作業があった。ラウンドテーブルに参加することで、自らの中にその語り合いや編み直しのサイクルを生んでいく。私が福井に足を運び、ラウンドテーブルに参加する理由はそこにある。今回は、数年前に出会った子ども達とのかかわり合いを、再度編み直して報告した。編み直しの作業をとおして、数年前の出来事が新しいものとして形を成し、新たな範例となっていく。

私自身の報告を含め、ラウンドテーブルで語られる子ども達の姿やかかわり合いの場面は、極めて個別性の高いものである。しかし、丁寧な語りと聴き手の中に生まれる問いを往還させ、時に聴き手自身のエピソードを重ね合わせていくことによって、個別性の高い姿や場面が参加者の中で共有されていく。今回のラウンドテーブルで聴いた実践報告も、聴き手側の方々が話されたエピソードも興味深いものばかりだった。多文化共生社会の基盤づくりを目指し

て、学校、地域、各種専門機関が協働していく過程についての報告、学生による Art in life という活動の報告、特別支援学校に通う子どもとのかかわり合いについての話など、多様な実践報告を聴くことができた。報告のテーマやそこに登場する子ども達の実態は当然異なる。報告者の立場や経歴も異なる。しかしながら、報告者の語りを聴くと私の中には、これまで出会った子ども達や同僚の姿、印象に残る場面が思い浮かんでくる。なぜなら、目の前の状況に悩み、試行錯誤を重ねながら実践をしてきたという点は共通しており、共有できるからである。

これまでに述べたことは、決して特別なことではなく、私たちの身の回りにおいても行われていることである。現在、私は特別支援学校に勤務しており、子ども達が下校したあとに、同僚とクラスの子どもの話をする。「あのときは、～という気持ちだったのではないか」「～すると、より活動が盛り上がったのではないか」などと話は尽きない。時に「以前、見られた姿は～という気持ちの表れだったのではないか」と過去の姿を想起し、その姿を捉え直す、意味や出来事を編み直すことがある。また、私の職場には、多数の教員がいる。その経歴や教育観、担任する子ども達の実態も多様であるが、目の前の子ども達と教育的にかかわり合う点は、何ら変わりなく共通している。このようにして考えると、ラウンドテーブルが大切にする実践のプロセスを語り合い、聴き合い、問いを深める時間と空間をつくり出すことが、身の回

りにより意識され、活発になっていけば、私たちの学びのサイクルは更に高次なものに変化していくと思

うのである。そして、そのために私自身に何ができるか、同僚や他職種と何ができるか考えていきたい。

福井ラウンドテーブルに参加して

大阪教育大学連合教職大学院 院生 胡 精吾

福井ラウンドテーブルを知ったのは、大阪教育大学連合教職大学院の講義「行政研修の企画・運営」において、「関西指導主事フォーラム」という研修を院生で企画し、分科会の中でラウンドテーブルを行おうと相談したときである。資料を探したがラウンドテーブルとは一体何であるのか、そこにどのような学びがあるのか分からなかった。担当指導教官である富田教授より薦められて、やはり福井ラウンドテーブルを実際に体験することで、その答えを探そうと考えた。また自身の実践課題研究について報告することで何か学びが得られるのではないかと期待をもって参加した。

ラウンドテーブルを体験して感じたことは「迷い」と「心地良さ」である。参加する前に抱いていた、実践課題研究に対する学びが得られる期待は良い意味で裏切られた。むしろ新たな迷いが残った。それは自身の語りがとても拙く、報告した実践が聴き手の方に半分も伝わりきれていないと感じるものであったからかもしれない。しかしそれに関らず、熱心に聴いてもらえたことに、その場で共に悩み共に考えてもらえたことに福井ラウンドテーブルの心地良さを感じることができた。

「迷い」と表現したが今振り返ると、この迷いこそが自身の実践課題研究についての学びと成り得るものであった。それは「悩むこと」である。本当にこれで良いのか、他にも良いものがあるのではないかと迷う。はっきりしない、わからないことがあるから

それを知ろうとする。調べたり尋ねたり、様々な行動を起こすことになる。これこそが学びに向かう力ではないだろうか。学び続ける教員に必要なものは、その原動力となる「解決したい、何とかしたい」という課題をもつことだとわかった。

福井ラウンドテーブルとは、省察的協働探究と書き表すことができるのではないか。そこには、語り手が実践を語ることで「本当にこれで良かったのか、他に方法はなかったのか」ともう一度自身の実践を問い直す場がある。聴き手はじっくりと語り手の話を聴いてその実践の中にある価値を共に探究する。それは主体的で対話的な深い学びの形であると言える。これまでの教師から子どもへの知識注入型の教育から、子どもが主体的に知識・技能を学びとる知識吸収型の教育への転換を示したものが福井ラウンドテーブルであると感じた。今回福井ラウンドテーブルに参加して、私自身が知識注入型の教育を多く受けて来たこと、それだけでは主体性や学びに向かう力が育たないことに気付くことができた。ラウンドテーブルの最後に、コーディネーターの早稲田大学村田教授が話された「迷いがあっても良い。ラウンドテーブルとは学びとる場である。」という言葉が心に残っている。これからも学び続ける教員として、優れた多くの実践から学びとるために、また福井ラウンドテーブルに戻ってきたい。その前にまず「関西指導主事フォーラム」において、ラウンドテーブルを企画・運営し、省察的協働探究を大阪で実現させたいと思う。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

神奈川大学 特任助教 大関 由貴

福井ラウンドテーブルへの参加は、4回目となります。「ラウンドテーブル、どうだった？」と聞かれ、私は答えに困ることがあります。私にとって参加体験というのは、ラウンドテーブル当日という一時点で完結するものではないからです。それは、自分の思考や行動の選択、人とのつながりなど実践家としての営みに継続的に影響を与えるものだ、と、参加回数を重ねるごとに実感するようになりました。今回、サマーセッションへの参加が決まり、報告内容を準備する中で、過去3回（3年分）の報告資料を読み返していました。その中で、「この実践がこれにつながったのか」とか「この時、報告をしたり、グループの報告を聞いて、これに気づいたんだ」と、それまでのいくつかの実践と振り返りの体験が、「今」につながっていたことが確認できました。

報告の準備をするときは、文脈を丁寧に共有することを心がけています。私の専門は日本語教育で、福井ラウンドテーブルにはこの領域からの参加者が少ないからです。最近、このプロセスがとても有意義だとわかりました。自分が関わる日本語教育実践が社会や所属機関の中でどのような位置づけにあるのかという視点で見直す機会となるからです。それにより、実践の中で生じたトラブルや混乱が、起こるべくして起きた構造的な問題であったことが確認できたり、自分と他者の立場による視点の違い、あるいは価値

観の異なりから起きていたことだったという解釈ができます。また、私の場合、実践の只中では問題ばかりが心を占めてしまいがちですが、成果の部分にも目を留め総合的に捉え直せるようになります。状況は引き続きチャレンジングであっても、私の中にその状況に向き合うための視点が増えたり、心に余裕を取り戻したりと、作戦会議のような時を体験できます。他者に伝えることを意識して実践を整理することは自分に欠かせないことだと、当日の参加を前に実感しました。

一方、当日にしか得られないものは、自分と異なる地域や領域、立場、職歴の方々が「仲間」として見えてくるということです。今回は特に「励まし」の大切さに気づきました。他の領域の方々の報告やテーブルでのやりとりを聞いていると、「これって日本語教育だけの課題じゃないのか」ということに驚かされ、課題の再定義が起こります。また、報告者の方が、その当時の率直な状況や感情を共有してくださるため、聞きながら自分の経験も思い起こされ、苦しみや喜びをともに味わったような感覚を覚えます。それらが、不思議にも現場に戻ってから私に冷静さや情熱を与えてくれることがあります。

このようにラウンドテーブルの参加体験はとても味わい深いものです。日本語教育の領域でも、実践を他者と振り返っていく活動が広まっていけばと願っており、地道に仲間を増やしていこうとしています。

福井ラウンドテーブルから学びたいこと

信州大学教育学部附属特別支援学校 鶴田 恵市

信州の地で

「信州大学でも附属学校園を中心にラウンドテーブルを行う」と2年ほど前に附属学校園の教員に知らされた。「ラウンドテーブルって何だろう？」そんなことから準備が進み昨年度は、松本で第1回信州ラウンドテーブルが行われた。私もファシリテーターとして参加した。終わってほっとしたと同時に、「参加した先生方にとって満足いく会となったのだろうか」と心配でならなかった。「福井ではどんなラウンドテーブルをしているのだろうか」そんなことが頭をよぎった。

「第2回信州ラウンドテーブルの前に福井で自分も実践を語ってみたい」そんな思いをもって今回の「サマーセッション」に参加した。

自分の実践を振り返る

当日までの資料づくりでは、自分なりに1年間の実践を振り返りながらまとめていった。頭の中のイメージではなんとなくつながっていたストーリーも改めて言語化することにより、「この支援のねらいは結局何だったのか」「子どもの育ちは、今につながっているのか」と自分の実践の意味を振り返る作業となった。大変な作業ではあったが、「日々の実践が自己満足でなく、担当するお子さんを中心にした実践であったか」を振り返ることにもつながった。自分の実践をまとめることは、過去を振り返るだけでなく、今の自分の実践やこの先の実践を見つめ直すことにもなることを実感した。

じっくり語ること、聴き合うこと

「初めて会うメンバーとどのようなラウンドテーブルになるのか」と期待と不安を抱きながら参加した。実際に始めてみると不安をよそに60分ほど自分の実践を語り続けることになった。一つの事例について、これほどじっくりと語るとは初めての経験であった。資料を作る際にまとめたつもりでいたが、話していると更に気がつくことが多くあり、語ることの大切さを改めて感じる事ができた。また、聴いてくださる方達が、まるで自分事のように事例について質問をしたり、アイディアを出したりしてくださり、私自身がさらに語りやすくなっていった。私自身も他の方の発表に対して「そのとき、先生はどう考えているのか」「この先この実践はどうなっていくのか」と知りたいことが次々に出てきた。

その日に初めて会った仲間であるはずなのに、もう何回も話をしている仲間ようであった。「ここは、自ら求めてくる人達が集っているのだ。語り合うこと、聴き合うことを求めている雰囲気が会場中にあった。あ〜語り合うってこういうことか……」と実感した一日であった。

学び合う仲間

信州の地でも自らの実践を語り、聴き合い、互いに問いを深めることを求める仲間を増やしたい。そんな参加者が集う信州ラウンドテーブルにしていきたいと胸に誓って帰路についた。

「私」を語り合うことで表現する

福井大学教職大学院教職専門性開発コース3年 山田 芳裕

「大切にしていることは、実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。」何気なく開いた newsletterNo.99 の見開きにある、専攻長柳澤昌一先生のお言葉である。今回のラウンドテーブルでは、この言葉が意味するであろう、ある種の「渦」に、ここまでかと言われるほど巻き込まれた。同時に「新鮮さ」と「熱量」を感じたのだ。ちょうど2年前、生まれて初めてラウンドテーブルに参加させていただいた時には感じ得なかった感覚である。福井大学教職大学院が起こす「渦」に、巻き込まれっぱなしだった二日間を振り返る。

6月24日（土）は Zone C に参加した。福井ラウンドテーブルは今回で5回目の参加となるが、Zone C の参加は初めてであった。これまでは長期インターンシップに少しでも還元できるようにと、「Zone A 学校」や「Zone D 授業研究」等のセッションに参加することが多かった。今回、Zone C を選択した理由の一つに「コミュニティ」というキーワードがある。またテーマが「異質との出会い」ということで、学校現場とは一味違う人々と、コミュニティの持続的な発展について語ることが楽しそうだと直感的に感じた。会場も福井大学ではなく駅前の AOSSA ということもあり、場所という環境の変化も、ある意味新鮮であった。

Zone C では、福井市の殿下地区にスポットを当て、セッションが始まっていった。突然だが皆さんは「異質」といった言葉に対して、どのようなイメージを持つだろうか。おそらく少しネガティブな印象を受ける人が多数なのではないかと思う。私もそうであった。何か、これまで完成

した物の中に、新参加者が介入してくるような違和感を覚えたのだった。しかし、半ば強制的に「異質」と出会い語り合うことにより、私の中のイメージは崩れ始める。シンポジストの方の意見としても「『異質』は一般的には排除されるものである」とあった。人間関係においても疎まれてしまったり、トラブルの原因になったりする現実があるからだ。以上の話を理解した上で、近くのパネルと小グループで軽くセッションを行った。するとある院生は「異質をポジティブに捉えようとするとどうか」と言った意見や「異質を『可能性』とも言い換えられないか。そう思うことで、学びの幅が広がるのでは？」などといった、私の中には生まれなかった意見が数々生成されていった。まさに私の中に「異質」なものが溶け込んできた瞬間であった。同時に心地良さも覚えた。この場に参加していなければ、話すことはおろか出会うこともなかっただろう方と交流することで、掘り固まっていた考えが少し溶け出した感覚であった。新しく、一見逸脱した意見であっても「それ面白い」と、一度受け入れる柔軟な考えを持つことの意義を、少しながら感じる事ができた。

6月25日（日）は、小グループで実践を語り合った。私はラウンドテーブルにおいて、「私」という人間を知ってもらった上で実践を聴いて頂きたいため、必ず自己紹介の中でこれまでの歩んできた人生を語る。あまり口にしたくないような過去の失敗や苦い経験も、包み隠さず語ることにしている。「私」という「人となり」を分かって頂いてから、実践を聴いてもらいたいと強く思っているからである。

今回は、今年度取り組んでいる「週間カンファレンス企画運営会議（通称：M2 会議）」における M3 としての関わり方について話すことにした。今年度より M3 という立場で会議を俯瞰的に捉え、アドバイスを行う役割を担っている。その会議に参加することで生まれる葛藤や悩み、これからの展望等を包み隠さず赤裸々に語った。院生としての成長について話していると、長崎大学の本多博先生から「学びの集団（院生）の成長って何？」と質問を頂いた。私は、戸惑いながらも「話し合う中で、気付き実践していくサイクルのようなものですかね」と言葉も詰まりながら答えた。本多先生は、ご自身の管理職経験を踏まえながら「今行

っている実践は、実際の現場でも起こること。管理職が他の教職員を、どう動かすかと言ったような。トップダウンではなく、あえて自分が（ここでは M1, M2 院生）気付いたかのように、人を動かす工夫が大切だね。」と、私の経験を価値付けてくださった。会議の「運営者」である M2 院生をいかに助け、共に成長していけるか。そのことを語るテーブルには、本気で議論してくださる先生方の熱い思いを感じ取ることができた。これから会議に携わっていく中で、今回のテーブルで感じた情熱を絶やすことなく、冷静に会議に参画していきたいと思う。

「学び」ラウンドテーブルを終えて

福井大学教職大学院教職専門性開発コース 2 年 田中 亮

去年と合わせて人生で 3 回目のラウンドテーブルに参加させていただいた。去年と明らかに違った点は、自分が報告者として現職の先生方、大学の教授の方々の前で 1 年間行ってきた「インターンシップにおける生徒とのかかわり」「教科の意義を踏まえた授業実践」、「木曜カンファレンスにおけるふりかえり、自己の考え方の変容」などについて報告させていただいたことである。日々の失敗や実践時の自分の感情を織り交ぜ話をさせていただき、聞いてくださった先生方から、私の考え方や実践に対しての肯定的な意見や、先生方の経験から私の失敗に対するアドバイスをしていただいた。自分の実践を価値付けていただいたことで次への課題が明確になり、やっていきたいことへの自信が生まれた。普段木曜カンファレンスでインターンシップにおける振り返りを行っている。ラウンドテーブルの良さは、普通の学生

同士の振り返りだけでは見えてこない視点をさまざまな経験を重ねてきた他県で活躍されている先生方から言葉をいただくことによって、自己の実践をより深く省察することができることだと考える。

実践報告会では東京大学教育学部附属中等教育学校の福島教諭の実践を聞かせていただいた。福島教諭の実践では、「肝高の阿麻和利」・「琉球舞踊」といったダンス・身体表現を通して「5つの力」（「こ



とばの力」「論理の力」「身体・表現の力」「情報の力」「関係の力」)を身につけさせるための総合的な学習を行っていた。

報告時の福島教諭の言葉に多くの感銘を受けた。まず「境界を越える探究学習」とは答えのないもの(問い)を自分自身で追及していく。そしてその探究を行っていくのは生徒自身、であり、「こうでなければならぬ」ということはいっさいなく決めていくのは子どもたちであるということ。そして福島教諭の考える「深い学び」として、現在自分自身が持っている知識を、「こうあってほしい」という思いを持ちながら現地や現場(本物を知る)に持って行ってすり



合わせることであり、学ぶことによって新たな自分に出会える。自由になれる。それが学ぶことの喜びでありそういった生徒の学びを福島教諭は「たくまざるして、たくらむ」ことが大切で、まずは教師の考えていることに生徒が少しでも乗ってくれること、そして乗ってくれた先は生徒がきめることが大切であるとおっしゃられていた。私自身もここ最近木曜カンファレンスなどを通して、「学びとは」「深い学びとは」「探求とは」といったあたりまえにあるものを再度自分自身でその意義を捉えなおすようになった。こういった自分の中でわかっているようでわかっていないことについて大規模な実践の結果に基づいてそのようなことに関する考え方を聞いたことも自分にとってはとても大きな学びであった。

教職大学院生として参加できるラウンドテーブルは残り一回である。ラウンドテーブルではいろいろな立場の人々がそれぞれの目的に応じて学びたいと思いつくられている。私も残りの半年、実践を積み重ね、振り返ることで「学び」を深めていきたい。

【編集後記】福井大学教職大学院では、本ラウンド特集号を編集しながら、次の「実践研究福井ラウンドテーブル Spring Sessions 2018」の企画と準備を行っています。7年ぶりの大雪に見舞われるなか、それはまるで春を待ちわびるような気持ちにも似ています。ラウンドに参加して下さった皆さんの声が励みになっています。ありがとうございます。(半原・中島)

教職大学院 Newsletter **No.106**

2018.2.4 内報版発行

2018.2.27 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dptdfukui@yahoo.co.jp